

オール.フィジカル

まろかに

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『モノ』を発動した事により、全ては始まった。『悲劇』『驚愕』『憤怒』『歓喜』『興奮』。
『ホップ』『スピード』『キック』。〈バード〉〈モール〉。

そして

『ある少女』も。

目次

1話	スタート・ラン	1
2話	全滅フェスティバル	18

1話 スタート・ラン

カチャ：

『モノ』が『ソレ』を持っている

カチイ！

『モノ』が『ソレ』を発動した

『ソコ』から『ストーリー』は始まった

簡単に単純なことで『ソレ』は始まった

簡単に単純なことで『ソレ』は始まってしまった

――

――

――

ザツ：ザツ：

『あくあ．．まくたかあ．．』

イメリアルア（18歳 『元』速読者）『やつぱり『速読』1本で生きていくのは、きつ

すぎるかなあ．．』ザツ：ザツ：

独り言を呟きながら。白色と青色の服を揺らしながら。18歳、『元』速読者の『イメリルア』は嘆いていた。そう、『クビ』になったのだ。

イメリルア『んく： マネーどうしよ：』チャリン： チャリン：

――

――

――

ガチャ： ガチャリ！

イメリルア『たーだいまあ』ギイイ：

少し古そうな家の少し古そうなドアを『イメリルア』は開けた

『おかえりー』

アペレンス（16歳）『イメリルア』の『妹』『ご飯、出来てるよ』

机の上の皿からは湯気がたっていた。そして、その机の椅子には『アペレンス』。『イメリルア』の『妹』が座っていた。

イメリルア『おうまそー：』タツ： タツ：

アペレンス『： お姉ちゃん： なんか、声が暗い』

イメリルア『あく、分かっちゃった：？ 実はさあ、『クビ』にされてさあ』ポイツ
カバンを投げながら『イメリルア』は嘆いた。

アペレンス 『うそーん：』

イメリルア 『あんの、クソ上司い： 絶対に許さねえく：』 ドサツ!!

アペレンス 『えつ、退職金は？』

イメリルア 『今回は出なくてさあ： いただきます：』 パン：

アペレンス 『うそーん：』

イメリルア 『ちよつと： 後で、ハロワ（ハローワーク）行ってくる：』 モグモグ： モグモグ：

アペレンス 『あ、じゃあさあ： ついでに醤油買ってきて』

イメリルア 『りょーかーい』 モグモグ： モグモグ：

ー

ー

ー

イメリルア 『いつてきまーす：』 ガチャ：

アペレンス 『いつてらつしやーい』

ボタン：

イメリルア 『あゝあ： 普通に仕事就こうかなあ：』 ザツ： ザツ：

『イメリルア』が、しつこいくらい嘆いている時だった。

『イメリルア』は呆然としていた、当たり前の反応だろう。

アルリア『いいから！早く！』

『777777ウ：オ33333311：』

どこかからか、『変な言葉』が聞こえてきた。

アルリア『ツ：！』クルツ！！

イメリルア『え：？』チラ：

言ったのは『さっきのヤツ』だった。

『0433：タチ：ハ：オソイ：』バキバキ：！！バキバキ：！！

明らか『サイズ』は違うのだが、『死んだ場所』がそこなので、『ソイツ』以外にないな
いとは考えられないのである。

アルリア『早く逃げろ！奴がどんな、力を持っているか分からない内に！』ガチャ！！

イメリルア『え：？え：？』

『ステニ：コウゲキ：』

アルリア『ほら、もう既に攻撃してるって言ってるんだからさあ！』ガチャ！！

『シヨウトシタケド：キヤント：ダツタ：』

イメリルア『：は？』キョトン：

アルリア『へ：？』

イメルルア『：もしかして：騙し？』

『タブン・ソレ：』

アルリア『：だ、騙すなあ！』

イメルルア『：もしかして、騙されやすい人？』

アルリア『んつな、訳ねえだろ！高校生まで『サンタさんって、本当にいる』って事を信じてたなんて口が朽ち果てても言わねえからな！』

イメルルア『：言っちゃってるし、地味にギャクだし』

アルリア『あ、ヤベ：』

『トリアエズ：サツス：』

『巨大カラス』だった『モノ』は、背中から翼を生やした。

バサアアアア！

アルリア『じゃなくて！』ガシツ！！

イメルルア『ちよお!?!』グンツ！！

『アルリア』は『イメルルア』を掴み、全速力で走った。

『ニガスワケ：デハナイ：』バサア

『モノ』は、追いかけた。

——

—

1

『ハア・！ハア・！』

イメルルア『腕痛つ： 足痛つ：』ゼー：ゼー：

アルリア『もう少し、鍛えとけ： いくら、一般人でも：』

イメルルア『結構： ハア・！横暴すぎません：？』ゼー：ゼー：

アルリア『：』

イメルルア『というか： ふうう： さっきの、ヤツなんなんですか：？全然危険に見えませんが：』

アルリア『それが悪質なんだよ： 『全然危険そうに見えない』： それが悪質なんだ』

イメルルア『え：？』

アルリア『アイツらは『人間の警戒心』を解こうとしてくる。着ぐるみの様に可愛く見せてな』

アルリア『そのせいで『警戒心』がなくなり、人間は『殺される』： つていう訳だ』
イメルルア『： 『巨大』の時でもって事ですか？』

アルリア『ああ： 俺が撃たなかったら、お前は上手く丸められて殺されていただろうな』

イメリルア『：』というか『巨大』なヤツと、さっきのヤツって同一なんですか？』
アルリア『：』 奴等の名前は『セパレイタ』。何故かは分からないが『進化』出来るんだ』

イメリルア『は、はあ：』 つまり出来ると：』

『ミツケタア』

優しそうな声が聞こえた。

イメリルア&アルリア『：』！』クルツ！！

バード・セパレイタ『ナアンデ、ニゲタノサア』

アルリア『逃げたんじやない』スツ：

ビビ： カチャツ：

アルリア『態勢を立て直しただけだ』カチャツ：

『アルリア』は、なにもない空間から『機械』の様な『モノ』を取り出した。そう、唐突に。

そして、ソレを腰に触れた瞬間

ビビ： カシユウウ： カチャンツ！

自動で巻かれた。

バード・セパレイタ『ナンだ：』ソレ』

イメリルア『機械…?』

アルリア『詳しい事は後で説明してやるよ: それまで、色々な事は『自己責任』で任せたぞ』スツ:

ビビ: パシユンツ!

カチャツ: !

そうして『アルリア』は、なにもない空間から『釘の様な真つ直ぐな棒』を取り出した。そう、唐突に。そう、『再び』

そうして: その天面を『押し込んだ』

ググ: カチイ!

【ホップ】

アルリア『『装強』』ギユインギユインギユイン: ギユインギユインギユイン:

そうして: それを『機械』に『はめ込んだ』

カチャンツ!

【Begin】

【ハイ ホップ】

ボシユンツ! ボシユンツ! ボシユンツ! ボシユンツ! ボシユンツ! ボシユンツ! グググググツ!
ブワアアアア:

アルリア『おい、無事か?』フツ:

イメリルア『え、あ、ああ: はい: (すげえ: 抜いたら消えた:)』

アルリア『とりあえず: そうだな: お前の家は、ここから近いか?』

イメリルア『えっ、あつ: はい:』

アルリア『なら、今すぐ帰れ: 近くに『セパレイタ』が残っているかもしれないから』

イメリルア『あ、わ: 分かりました:』クルツ: ダツ!!ダツ!!

アルリア『:ん』ピピ:

『アルリア』の電話が鳴った。

アルリア『はい、もしもし?』

「倒した?」

アルリア『ああ、ついさっきな』

『シクサ』が壊れるのは確認した?」

アルリア『いや、空中から地面に叩き落としたんで: 確認はしてないが』

「確認しろお!」

アルリア『はいはい、うるさいうるさい』

「この前も確認しなかったら、倒しきれてなかったじゃんか!」

アルリア『う：』

「はーやーくー！」

アルリア『はいはい：』ガサゴソ： ガサゴソ：

『アルリア』は渋々探し始めた。

ー

ー

ー

『イメリルア』は思った。

イメリルア『（最近のヒーローショーって設定もこつてるなあ：）』ザツ： ザツ：
と。

イメリルア『（まあ、恐らく： 今、あっちでは打ち上げでもやってるんだろなあ）』

ザツ： ザツ：

『イメリルア』が歩いている風景に変わりはなかった。いつも歩いている風景だ。

イメリルア『（帰って、夕御飯たべよ）』ザツ： ザツ：

しかし、1つだけ違う風景があった。

イメリルア『：え：？』

そう： 1番自分が見た事ある景色だけ違うのである。

イメリルア『え：？^c：g：じゃ：ない：？』
そう：『自分の家』が×××いたのだ。

2話・全滅フェスティバル

ガチャヤ：ゴソ：

アルリア『しつかりと確認したが：ないぞ』

「土とかに混じってない？」

アルリア『ここら一带は調べたが：なかった』

「あつそく：ちゃんと、2つあった？」

アルリア『ああ：ちゃんと、2：ん？』

「ん？どうかした？あつた？ねえ、あつた？」

アルリア『おい、ちよつと待て：『2つ』だと：？』

『アルリア』は聞き間違いかと思ひ、焦って聞き直した。

「そう、2つ。だつて2体出てるつて言つたじゃん」

アルリア『：ヤバイ！』クルッ!!ダッ!!ダッ!!

「えっ!?あ！あと『アレ』送つ：」

ブツンッ！

アルリア『くそっ！』ダッ!!ダッ!!

――

――

――

イメリルア『：なに：これ：』グチャヤ：グチャヤ：

地面：と 言 え ない ほど、原 型 が 残 っ て い ない ほど 『溶 け て い た』

イメリルア『：アペ：？ いる：？』グチャヤ：グチャヤ：

：と、いうよりかは『溶かされていた』。『歩くべき場所』も。『帰るべき場所』も。そして

グチャヤリ：！

イメリルア『：え：？』クル：

『守るべき』 || 『人』 || 『愛した』も

イメリルア『：あ： ああ： あ：』

：オ：ヤン：

イメリルア『ああ：あ：あ：』

ドロオ：

――

――

1

アルリア 『ツ：！』 ダツ!!ダツ!!

『もう、手遅れだぞ?』

アルリア 『：！』 クルツ!!

『既に、何人かは殺した』

アルリア 『：。お前：。『モグラ』か：。?』

『ソレ』は、静かに訂正した。

モール・セパレイタ 『正しくは『モール』：。だけどねえ』

アルリア 『成る程：。知性を優先して『進化』させたか』

モール・セパレイタ 『正解』ドロドロ：。

アルリア 『：。地面が溶けている：。?』

モール・セパレイタ 『知性』があるからこそ言うが：。こっちは『目』が見えない。故に：。君がどんなフアツションかも：。どんな顔なのかも分からない』ドロドロ：。!!

『ソレ』は、余裕な口調で喋った。

アルリア 『：。だから?』

モール・セパレイタ 『故に『罪悪感』という『モノ』がない：。『思う』という行為をしないが良い。故に『無差別』に殺せる：。故に『本気』っていう事だ』ドロドロ!!ドロ

ドロ!!

アルリア『『目』が見えなくとも、『聴覚』で悲鳴は聞こえる筈だぞ?』スツ・
ビビ・カチャ・

『アルリア』は、再び『空間』から『機械』を取り出した。

アルリア『そういう事には『罪悪感』はないのか?』カチャツ・カシユウウ・カチャ
ンツ!!

モール・セパレイタ『故に、だ・一番に『喉』を潰す。悲鳴もあげられない程に』
アルリア『ふう・贅沢なぼつちやんだな』カチャツ・カチイ!!

【ホップ】

アルリア『『装強』ギユインギユインギユイン・

カチャンツ!

【Begin】

【ハイ ホップ】

ボシユンツッ!ボシユンツッ!ボシユンツッ!ボシユンツッ!ボシユンツッ!ググググッ!

アルリア(チューンホップ)『やっぱ、欲張りなやつってのは・どこにでもいるんだ
な』

モール・セパレイタ『あ、友達!』スツ!!

アルリア（チューンホップ）『もう1体!?』クルツ!!
そこには、なにもなかった。

アルリア（チューンホップ）『騙しやがったな!?』クルツ!!

アルリア（チューンホップ）『い、いない:!?』ガチャ!!

ドロオ!

『アルリア』の後ろの地面が『溶けた』

瞬間。

アルリア（チューンホップ）『そこかッ!』クルツ!!ガチャ!!

ダアンツッ!ダアンツッ!ダアンツッ!

『アルリア』が後ろに向けて『弾丸』を発射した

瞬間。

『地面を踏みしめる音は:よく、聞こえていた』

ヒュッ

ザシユンツッ!

アルリア（チューンホップ）『ッ!?』ブシユッ
!!!!

ドサドサッ！

アルリア（チューンホップ）『くそ：！』ドロドロ：

『セパレイタ』は、『土』から出てきた。

モール・セパレイタ『言つたる、『目』が見えないって：故に友達がいる事なんて分からないのさ：君、騙されやすい性格だろ？』

アルリア（チューンホップ）『さあな：自分の性格つてのは自分では分からないモノ：だぞ：？』ドロドロ：！！

モール・セパレイタ『丁度良い：未練があるまま：殺せる』スツ：

『セパレイタ』が攻撃をしようとした瞬間。

『アルリア』が足掻きをしようとした瞬間。

ザッ：

モール・セパレイタ『：！』ピクツ：

アルリア『：？』

モール・セパレイタ『：まだ、生き残りがいたのか』

アルリア『：！アイツは：！』

ザツ： ザツ：

アルリア『さっきの：！』
歩いてきたのは

イメリルア『：』 ザツ： ザツ：

『イメリルア』だった。

モール・セパレイタ『：』 歩幅の感じからすると： 喉を潰すほどでもなさそうだな』
ニヤツ：

アルリア『ツ：』 おい！逃げろツ！家に籠ってる！』

モール・セパレイタ『無駄だ、無駄だ：』 気づかれたとしても： なにも出来まい』ド
ロドロ：！！

『セパレイタ』は、再び『地面に潜った』。

アルリア『ツ：！』 ググ：！！

既に【ホップ】は解除されていた。

イメリルア『:.』ザツ:. ザツ:

『イメリルア』は、うつむいたままだった。

アルリア『:.!』

『アルリア』は『異変』に気がついた。『イメリルア』の『手』になにかがあるのだ。

アルリア『アレは:.俺達の:.?』

イメリルア『:.』ピタ:

ドサ:. ガチャ:

『イメリルア』は『突然』:.手に持っているモノを開けた。

どうやら『アタツシユケース』のようだ。

イメリルア『:.』ペラ:

『イメリルア』は『咄嗟』に、『説明書』を読み出した

イメリルア『:.』ペラペラペラペラペラペラペラペラ:

パタン:

そう、とてつもない『スピード』で。

アルリア『なに、やってんだ:.!おい!逃げろ!それを置いて!』

イメリルア『:.』カチャツ:

そして:.『アルリア』が使っている『機械』と同じ『機械』を取り出した。

イメリルア『：』ス：

カシユウウウ： カチャンツ！

アルリア『な：！?』

そして： 『アルリア』が使っている『棒』と似たような『棒』を取り出した。

イメリルア『：』カチャツ：

そして『押し込んだ』。

カチイ！

〔スピード〕

イメリルア『：』ギユインギユインギユインギユイン： ギユインギユインギユイン

ギユイン：

ガサア！

『突然』ヤツが出てきた

モール・セパレイタ『そこだ』チャキ!!

『瞬間』

スカツ

アルリア『：は：！?』ブワツ：!!

モール・セパレイタ『当たらなかつた：だと：?』ブワアア：!!

ブワアアアア：!

『イメリルア』は、『アルリア』の後ろに移動していたのだ。

アルリア『：嘘だろ：!』ブワアアアアア：!!!!!

モール・セパレイタ『：!』クルツ!!

【Begin】

ブワアアアアアアアオオオオオオオツツ!!!

【クイック スピード】

イメリルア（チューンスピード）『：』ザザア：!!

アルリア『一瞬であそこに：というか、使えているのか：?』

イメリルア（チューンスピード）『：』セパレイタ』とか、言ったな』ゴソ：

『イメリルア』は、いつの間にか拾っていた『アタツシユケース』から、『武器』を取り出した。

イメリルア（チューンスピード）『お前には『なにも』感じさせない：『瞬間的』に『殺す』：チャキ：!!

モール・セパレイタ『殺す、ねえ：随分と物騒な言葉を使うじゃないか：君はb.』

ヒュッ

イメルルア（チューンスピード）『話が長い』

『いつの間にか』、『イメルルア』は『セパレイタ』の真後ろにいた。

モール・セパレイタ『ツ!?!』クルッ!!

ドパドパドパツ!ドパドパドパツ!

モール・セパレイタ『ガ：!?!』ビチャビチャッビチャアツ!!ガクッ!!

アルリア『：.なあ：.にがあ：.おこってるんだ：.?』

イメルルア（チューンスピード）『：.なあ、聞かせてよ：.』

そして静かに訊いた。

『私の『妹』を殺した時：.どんな気持ちだった?』

アルリア『：.!』

モール・セパレイタ『『妹』：.?』妹』：.つ：.さあ：.覚えてないな：.』

ヒユツ

ドパドパドパツ！ビチビチャアツ！！

モール・セパレイタ『グファア：！?』ビチャビチャツビチャアツ！！

イメルルア（チューンスピード）『まあ、無理もないか：お前は『目』が見えないらしいからな。無理もない無理もない』チャキ：

ヒユツ

ドヒユツ！グシヤグシリツ！ビチャツ！グシヤリツ！

モール・セパレイタ『ガバアア：があ：！』

イメルルア（チューンスピード）『だからさ：怒ってないよ』チャキ：

モール・セパレイタ『ハア：！ハア：！』ドロドロ：！！！！

イメルルア（チューンスピード）『故に』：どんな気持ちだった？』

アルリア『：！』

モール・セパレイタ『ハア：！ハア：！ハア：！』ボタバタツ！！！！ボタバタツ！！！！

『死に方も『違う』様にしないと、駄目なんじゃないの?』

モール・セパレイタ『ッ!?』ビクッ!!

イメリルア(チューンスピード)『残念、時間切れ』カチャツ:

『イメリルア』は『機械』を回し、押し込んだ。

カチャンツ!カチャンツ!

【First Second】

そうして:それを更に押し込んだ。

カチャイ!

【Attack】

『瞬間』『セパレイタ』は『初めて』恐怖を覚えた。見えないのに強大な恐怖を。

そして『初めて』声が出なかった。

言いたかったのに。言えなかった。

モール・セパレイタ『:!』

ヒュツ ヒュツ ヒュツ ヒュツ ヒュツ